

レズビアン，ゲイ，バイセクシュアルの当事者支援 活動と強みに着目したナラティブ研究

田中，将司

<https://hdl.handle.net/2324/6787386>

出版情報：Kyushu University, 2022, 博士（心理学），課程博士
バージョン：
権利関係：

氏名	田中 将司			
論文名	レズビアン，ゲイ，バイセクシュアルの当事者支援活動と強みに着目したナラティブ研究			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	金子 周平
	副査	九州大学	教授	増田 健太郎
	副査	九州大学	准教授	古賀 聡
	副査	立命館大学	教授	森岡 正芳

論文審査の結果の要旨

本論文は、それぞれ世代の異なるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル（以下、LGB と略記）へのインタビューを通して、各人にとっての LGBTQ+当事者支援活動と、LGB であることの強みについて、個別性の観点から考察したナラティブ研究である。

第 1 章では LGB を対象とした心理学研究をレビューした。特に LGB アイデンティティを認識し受け入れていくプロセスや、それに関連する各種の因子、内在化された同性愛嫌悪に関する先行研究から、LGB の経験は多様であり、単一のモデルではなく複合要因による複雑な過程として捉えられることを示した。さらに LGB であることの経験をポジティブ心理学の観点から強みとして捉える先行研究をレビューする中で、当事者の声から見出された強みに着目し、研究展望として文化・歴史的背景と社会構成主義に基づく研究の重要性を指摘した。最後に、当事者の日常の文脈に基づく個別的理解を進めていく本研究の主題を明らかにした。

第 2 章では、17 名の LGB を対象としたインタビュー調査により、本邦の LGB の性指向に基づく経験とその影響要因を探索し、一つのモデルを示した。第 3 章以降で個別性に注目する上で、まずは LGB の強みを含む様々な経験を総合的に捉えた知見を示す必要があった。結果として、当事者支援活動の経験の個人差がみられ、他者志向的に活動を経験する方が、当事者にとって自身の強みとして認識されやすいことが考察された。また、LGB が他者の期待や言動に配慮し、周囲に「謙る（自分の立場を低くする）」態度を持つことにも注目した。この態度形成には、家系のつながりや家族内の伝統的価値観の重視の要因が影響することが推察された。

第 3 章以降は、LGB の強みの中でも、当事者支援活動に至る背景に着目した。第 3 章は、当事者支援活動を行っているトランスジェンダーでバイセクシュアルの B のインタビューを対象ナラティブとした。B の背景として、性指向、ジェンダー、LGBTQ+コミュニティでのネガティブな経験を経て、当事者支援活動に自身の居場所を作ろうとしていたことが語られた。他者ではなく、自分が支えられようとしていた点は、強みに関する先行研究にはみられない知見であった。

第 4 章は、ゲイの高齢期の当事者 C のインタビューを対象ナラティブとした。C の活動の背景には、性指向、学生運動、エイズパニックの時代があった。C の性規範に捉われない生き方はエイズパニックによって一変した。C はエイズと結びついたネガティブな評価をセルフヘルプする手段として当事者支援活動に携わった。自分が支えられることを目的とした点は B と同様だが、C は活動を通して、かつて自身がポジティブに捉えられていた生き方を肯定できず、他者も自分も支えられなかった当事者支援活動となった。

第 5 章は、レズビアンの中年期の当事者 H のインタビューを対象ナラティブとした。H の活動の背景には、性指向、仕事や人間関係、年齢などがあつた。H にとっての当事者支援活動は、『脇

に置いて』過ごしてきたネガティブな出来事や自分自身を見つめる機会にもなっていた。しかし、差別や偏見がなくなる実感、『しんどい』思いから、先行研究で指摘されるような当事者支援活動の強みは得づらいものになっていた。

第6章では、第3章～第5章の当事者のナラティブ研究と第2章の知見との差異をまとめた。本研究の3人のナラティブはそれぞれ個別的なものであるが、自分も支えられるために当事者支援活動をしている点では共通していた。他者も自分も支えられる機会になったBの語りがあった一方、自分が支えられなかったことで他者を支える強みが経験されづらくなったC、Hの語りもあり、その経験の多様性が考察された。

第7章では、各章の研究がまとめられ、本論文の成果が整理された。特に、LGBであることの強みとして当事者支援活動を行う背景に、自分も支えられるという目的と実感が必要であったことを指摘した。心理学分野において、当事者支援活動は主に他者を支える強みと捉えられてきたが、自分も支えられる強みにも焦点を当てて理解をする方がより適切であると考えられた。この点への言及が本論文の大きな意義である。

論文審査においては、社会構成主義の立場からさらにインタビュー内容の考察を深められる可能性として、既存の概念を自明のものとしてせず、また研究者の当事者性の影響をさらに考慮することで、より個別的な意味の探求を行なっていくことについての示唆が行われた。本研究の主題の一つである「強み」をめぐる研究展望として、個々人の歴史と生活における思いに身を寄せるあり方についての議論が行われた。研究アプローチや考察のあり方をさらに厳密に検討する余地はあるが、個別性の高いLGBにとっての当事者支援活動の意味を、従来指摘されてきた強みとの関係において提示した点は、臨床心理学的意義が大きいと考えられる。

よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。